

原 著

透析導入後3年経過した2型糖尿病患者の 周囲の人々に対する思い

Feelings of people regarding type 2 diabetes mellitus patients
three years after starting hemodialysis

岡山 未来¹⁾, 稲垣 美智子²⁾

Miki Okayama¹⁾, Michiko Inagaki²⁾

¹⁾ 金沢医科大学看護学部, ²⁾ 金沢大学医薬保健研究域保健学系

¹⁾ School of Nursing, Kanazawa Medical University

²⁾ Faculty of Health Sciences, Institute of Medical Pharmaceutical and Health Sciences, Kanazawa University

キーワード

透析, 糖尿病, 思い, 周囲の人々

Key words

hemodialysis, diabetes mellitus, feelings, the people around patients

要 旨

本研究の目的は、透析導入3年を経過した糖尿病患者の周囲の人々に対する思いを記述することである。参加者3名に、現象学的アプローチを用いて面接を行った。分析の結果、4つのテーマが抽出された。
①透析を受けている自分の状態、または出来事を支えてくれた人々に、自分が生き延びてこられたことを感謝し、今の自分に出来る限りの恩返しをしたい
②自立した生活を保ちながらも、いざというときに頼ることの出来る人がいることに安堵する
③年々衰える身体を自覚しながら、周囲の中で役割を果たす自分を抛り所にして今日を生きる
④自分が成し遂げたいことのために、今、どうしてもこの身体が必要である
以上より、4つのテーマから浮かびあがった患者の姿を十分に活用したケアの重要性が示唆された。

Abstract

The principal aims of this study are to describe the feelings of people regarding type 2 diabetes mellitus patients three years after starting hemodialysis. Utilizing a phenomenological approach, we

連絡先：岡山 未来

金沢医科大学看護学部

〒920-0293 石川県河北郡内灘町大学1丁目1番地

conducted interviews with three participants. From our analysis, the following four themes were extracted:

- 1) Regarding the fact that survival was prolonged, participants were thankful to the persons who had supported them in their condition or the events relating to the dialysis and desired to show their gratitude as much as possible.
- 2) While participants were autonomous in their everyday, they were relieved that they had a person that they could rely on in an emergency.
- 3) While recognizing the fact that their physical status was declining year after year, participants lived in the present and relied on themselves to play a role among the people in their surroundings.
- 4) Participants felt that their body was absolutely necessary to accomplish what they desired.

The above findings suggest the importance of providing care that fully utilizes the patients' image that emerged from the four themes.

はじめに

透析導入の原疾患の第一位は糖尿病であり、中でも2型糖尿病患者が増加している¹⁾。透析医療の発展に伴い、糖尿病透析患者においても、高齢化や透析長期化が進みつつある²⁾。

透析患者は、3年を過ぎると身体・心理的に安定し、透析生活に慣れてくる³⁾。しかし、糖尿病患者の場合、3年を過ぎても糖尿病や透析治療による合併症の危険が高く、潜在的な死の恐怖⁴⁾が存在する。更に、解雇・離職⁵⁾や、生活範囲が狭まる⁶⁾ため、透析導入時期を過ぎた安定時期に入っても、患者を取り巻く社会は広がらない。家族や医療者といった身近な人とつくる限られた社会の中で生活していることが推測される。

先行研究で、研究者は、透析導入時期にある2型糖尿病患者が家族に思いを抱く体験をしていることを明らかにした⁷⁾。患者は、家族の中で、孤独で、疎外感を持った自分の姿を描きながら、糖尿病時代として過去を振り返り、自分と家族とのつながりを見つめ直すことで、現在の自分と家族を見直そうとしていた。そして、自分と家族が互いに支え合う存在であることに気づき、お互いが身近に結びついた家族の姿を描いた。テーマには、家族に対する思いやりが存在しているが、その思いを自ら表現することなく抱えるように大切にする患者の姿がそこにはあった。

一方、透析治療を開始して3年を過ぎた2型糖尿病患者に出会った際、家族に対する思いについて問いかけると、家族や、身近な人など周囲の人に対する思いを語る事ができていた。その語りは、導入時期のように家族への思いを大切にするという姿ではなく、今の自分の身体を大切に思い、その身体を元に、周囲の人とこれからの新しい関

係をつくろうとする患者の姿を感じた。

これまで2型糖尿病透析患者の研究では、生命維持に重点が置かれ、QOLの低さが報告されている^{8) 9)}。特に、2型糖尿病透析患者の場合、透析導入時期を中心に、対人関係トラブルや、周囲との孤立感を抱える事例が多数見受けられる¹⁰⁻¹⁵⁾。春木は、透析導入期から長期透析維持期までに患者が体験する心理プロセスを示している¹⁶⁾。否認に始まり、パニックや怒りなどのプロセスを通し、患者は透析患者として新しい自分を見出していく。ここから、透析導入から年数が経過することで、患者の心理が変化していくこと、さらに、その変化には、周囲の人からの影響を受けていることが推察できる。そこで、透析導入3年を過ぎた時期にある2型糖尿病透析患者の思いの報告¹⁷⁾を確認すると、この時期の患者が日々どのようなサポートを受け、周囲の人からのサポートを受けることに対しどのような思いを抱いているのかについて記述されていた。ただし、その内容は断片的であり、透析導入3年を経過した2型糖尿病患者を対象として、周囲の人への思いに焦点を当てた研究は見当たらなかった。

そこで、本研究の目的は、透析3年を過ぎた2型糖尿病患者の家族や医療者といった周囲の人への思いを記述し、浮かび上がる患者のありのままの姿を明らかにすることとした。研究の意義は、透析3年を過ぎた2型糖尿病患者の姿を明らかにすることによって、患者自身がその姿を描くことを目指したケアの提供につながると考える。そして、透析導入時期や透析3年を過ぎても周囲との関係性が安定しない2型糖尿病患者に対し、有効なケアになりうる可能性がある。

研究目的

本研究では、透析3年を過ぎた2型糖尿病患者の周囲の人々に対する思いを記述することにより、浮かび上がる患者のありのままの姿を明らかにすることを目的とした。

研究方法

1. 研究デザイン

起きている現象や出来事を記述し、それが何であるかを探索する因子探索研究¹⁸⁾を計画し、現象学的アプローチを用いた。現象学的アプローチとは生きられた体験としての現象の本質を明らかにしていくことを探求する記述的研究である¹⁹⁾。先行研究では、この手法を選択し、透析導入時期にある2型糖尿病患者が「家族を思い描く」という現象を明らかにした。本研究では、患者の表現を通じて、浮かび上がる患者のありのままの姿を明らかにする必要があるため、先行研究と同様の手法を選択した。

2. 研究参加者

研究参加者は、透析を導入して3年経過した成人2型糖尿病患者である。参加の条件は、認知機能の低下がみられないこと、心身の不安定な時期（合併症の悪化など）にある方は除外した。この2つの条件に関して、フィールド内の看護師から情報を得た。

研究フィールドは、A県内にある病院の血液浄化センターであった。看護責任者に研究の概要を説明し、参加の条件に該当する方を紹介してもらい、参加者を選定した。研究の参加依頼は、研究者が個別に行い、文書と口頭で研究目的と意義、具体的な方法について説明した。

3. データ収集

平成25年3月から5月にかけてデータ収集を行った。面接の日時については、参加者に希望日時を確認し、2名は透析日（透析後）に、1名は非透析日に行った。調査施設の個室において、研究者と参加者の1対1で面接を行った。現象学的態度による非構造化面接を行った。現象学的態度とは、現象を体験しているその人が感じ意識したことを、先入見なくありのままにとらえることである。面接中は、相手の体験している世界に近づいて理解しようとする姿勢を大切に、先入見を保留する態度で参加者の語りを聴くことに専念した。更に、研究者が知覚したことを、その時々で参加者に返し、参加者の知覚していることを確認し合い、深く対話を進めた。「現在、家族などの周囲

の人々に対してどのように思っていますか」という質問を皮切りに、参加者の語りを聴いた。

面接内容は、承諾を得てテープレコーダーに録音した。面接後に、録音された内容を逐語録に書き起こすとともに、面接時に観察された雰囲気、参加者の表情や仕草を記録した。面接時間は48～76分で、面接回数は1～2回であった。

4. 分析方法

Giorgi²⁰⁾によって示された方法を参考に分析を行った。

1) 全体の意味を捉えるために、逐語録を一例ずつ通して読み、その後さらに丁寧に読み返した。

2) 逐語録を精読しながら、周囲の人々に対する思いに関係する記述を抜き出し、さらにその移り変わりを明確にした。

3) 抽出した記述について、いくつかの語りをまとめて、それらを全体の文脈として理解し、意味単位を抽出した。それらを前後の文脈の流れや全体の意味と関連づけることによって、どのような意味を持つのか記述した。さらに、研究者の受けた印象をまとめた。

4) それぞれの意味単位を、それを特徴づける参加者の言葉で表した。参加者の言葉を抽象化して、意味単位ごとに記述を行った。

5) 各参加者から抽出された意味単位の中から、3名に共通する意味単位を取り出し、それぞれのテーマを見出した。

5. 真実性の確保

真実性の確保²¹⁾として以下のことを行った。現象学的態度を身につけるために、分析方法の学修のため、研修の参加を行い、現象学の学習に十分に時間をかけた。面接の際に、語りの中で不明な点があった場合はその時々で参加者に確認していった。

また、研究の全過程を通して、質的研究の経験が豊富で現象学の知識と実践に富み、更に、研究領域に熟知したスーパーバイザーから指導を受けた。

6. 倫理的配慮

研究の参加は参加者の自由意思とすること、研究のどの段階でも参加をとり止められること、研究参加の有無が患者の不利益にならないことを保証すること、個人情報厳守すること、個人を特定できないようにすること、得られた情報は研究以外の目的で使用しないことを説明した。また、参加者にネガティブな影響があらわれた時は直ち

に研究を中止し、速やかに必要な対応を行うことを説明した。そして、研究同意書への署名をもって研究参加とした。

更に、面接は参加者の透析治療に支障がなく、参加者の希望に沿った日時で行った。面接による心理面への影響に注意し、必要時には看護師にフォローを依頼できる体制を整えた。面接中は、心理面だけでなく、体調の変化にも注意し、参加者に確認した。

本研究は、金沢医科大学倫理審査委員会（承認番号：E138）の審査を受け、承認された。

表 1. 参加者の概要

	A氏	B氏	C氏
年齢	70代後半	60代前半	70代後半
性別	女性	女性	男性
透析歴	3.5年	8年	5年
糖尿病歴	25年	25年	25年
透析の頻度	週3回	週3回	週3回
合併症	3大合併症	3大合併症 心筋梗塞	3大合併症
家族構成	1人暮らし	1人暮らし	夫婦2人
面接回数	1回	1回	2回

結 果

1. 研究参加者の概要

透析施設に通院中の6名に研究参加を依頼した結果、3名から同意が得られた。参加者の一覧は表1のとおりである。

2. 参加者の周囲人々への思いから抽出されたテーマ

分析の結果から、4つのテーマを見出した。ここでは、テーマを構成している各参加者の意味単位を<>、その意味単位を表す参加者の語りを「」で示し、文脈をわかりやすくするために研究者が補った言葉は（）で表した。

表2は、各参加者の意味単位一覧である。

テーマ1

透析を受けている自分の状態、または出来事を支えてくれた人々に、自分が生き延びてこられたことを感謝し、今の自分に出来る限りの恩返しをしたい

患者は、自分の身体が不安定な状態であった時期を思い出していた。不安定な時期に、支えてくれた家族メンバーや、透析治療をして生きることが論してくれた医師などに対し、そのおかげで今があるのだと、不安定な状態を支えてくれたことを思い起こして、心から感謝した。そして、生きていることで味わえる幸せを感じながら、今を支えてくれる周囲の人々に対し、患者は可能な限り、お返しをしたいと願っていた。

A氏<透析治療をして生きることを選択できるように支えてくれた医師に対して感謝している>
「透析しません。この年になったら、当然死んでいい年だからね。で、もうこれ以上しませんって言って、相当困らせたのよ、先生に申し訳ないほど。それでも、こんこんと私を論してくださったり、もうちょっと長生きするためにはって言われたけど、私は、もう一切延命は、引き受けませんと。私、予定通り70超えたのよ。子どもがね、所帯持って、育児もちゃんとしているし、次、私の番でいいわけ。そしたら、せめてシャントだけでもって言われたんですけど、いや、それもしませんって。」

「(自分の思いを変えたのは)先生の熱心さですよ。本当にこういうばあちゃんに、そこまで親切に言ってくださる必要ないって言うほど言われたから。今、透析したら元気になる、ならないかということ、まったく計算に入っておりません。ただ、先生に対して、ひたすら、ああ、こんな訳の分からん患者にこれほどまでにこんこんと言われるかなあと思った時に、やっぱり私は、ここで折れなかったら、先生に対する本当に返礼でないと思ったね。」

A氏<透析治療をして生き延びてこれたからこそ、味わえる幸せに感謝し、可能な限り、恩返しをしたい>

「年いってから子どもを産んだから、(息子たちに対し)とにかく自分は、あなた(息子)の50歳をみることはできんと思うけど、何にも急いではいかんよって言って育ててきた。まあ、幸いにもそうやって育てた子が、もう、50歳を越えたから。」

「本当に医学の道で、これだけ長生きさせてもらったのは、本当に申し訳ない。ただひたすら沢山の費用を使って、こうして動いている間、自分が現在、お世話になっているものの何分の

表2. 意味単位一覧

各参加者の意味単位	
A氏	<p><透析治療をして生きることを選択できるように支えてくれた医師に対して感謝している></p> <p><透析治療をして生き延びてくれたからこそ、味わえる幸せに感謝し、可能な限り、恩返しをしたい></p> <p><甘え癖がつかないように、今は自分の身の回りのことは自分ひとりでしたい></p> <p><いざというときに、頼ることのできる人はいる></p> <p><周囲の中で役割を果たす自分であることが、自分にとって拠り所である></p> <p><今の自分の身体に対して決して過信をしない></p> <p><糖尿病時代のことに思いを馳せない></p> <p><自分の死を見据えて、人生の最後をどのように生きようか、自分で決めたい></p>
B氏	<p><不安定な時期に、本来なら自分が担うべき役割を他の家族メンバーにさせてしまったことへの謝罪の思いを持ちながら、その時期を支えてくれた家族に今、恩返しをしたい></p> <p><今、生きていることで味わえる幸せがある></p> <p><今の自分の身体を長らえさせるため、身体を大切にすることが今の自分の務めである></p> <p><成し遂げたいことのために、どうしても足だけは切りたくない></p> <p><自己管理の重要性に気付かなかった糖尿病時代を思い出す></p> <p><頼ることの出来る家族がいることに、安堵する></p> <p><年々衰える身体を自覚しながら、役割を果たすために、自分の病に負けるわけにはいかないと踏みとどまる></p> <p><身体が辛くとも、気持ちが落ち込んでも、そんな自分に負けるわけにはいかない></p>
C氏	<p><透析治療を受けることになった過去を振り返ることに意味はあると思直す></p> <p><透析後の不安定な状態を気にかけてくれる妻の言葉や、自分の身体を気にかける行為を思い浮かべ、支えてくれる妻に感謝する></p> <p><跡取りとしての家族がしっかりしているから安心している></p> <p><今でも気にかかる家族がいる></p> <p><楽しみを実行するという具体的な目標を持つことが、体力を維持するために必要である></p> <p><父であり祖父である役割は、十分に果たしたため、心残りは何もない></p>

1でも、ボランティアで返していかないと。自分でもっとも価値ある時間を過ごしていると思っています。感謝してます。目の前に来たことに、喜びを持って全力投球をするという日々を送っています。」

B氏<不安定な時期に、本来なら自分が担うべき役割を他の家族メンバーにさせてしまったことへの謝罪の思いを持ちながら、その時期を支えてくれた家族に今、恩返しをしたい>

「そのとき（糖尿病教育での入院）は、父さん（夫）勤めに行っていたし、娘も勤めに行っていたから。娘がいたから、父さんの食べるものとかは（変わりに支度をしてくれた）。だから、（食事内容が）気になっても、そんなの駄目って言えない、私、病院にいるし、世話にならないと。」

「元々、私が糖尿にならなければ、その、腎臓

までいかなければ、ここまでね、でも、うん。もう、なってしまったもの、どうにもならないしね。私が、やっぱり父さん（夫）のところ（入院施設）行ってあげないといけないという思いはいっぱいあります。何するわけでもないけれども。」

「私、この透析になるまでに、何遍も病院をね、出たり、入ったり。本当に迷惑掛けて。娘にもね。だけど、申し訳なかったと思うんですけど、今は私が、お父さん（夫）を、自分がどうであれ、やっぱりちゃんとしていかなんとは思っているんです。いっぱい迷惑かけた分ね。だから、自分がひどくても何しても、私、倒れるわけにはいかない。」

B氏<今、生きていることで味わえる幸せがある>

「『ただいまあ』って言って、保育園の靴投げて。

まあ、一番救われとる。私、この子（孫）に。来たら、もう私、うれしくて仕方ない。ほんと、お父さんのとこ行かんなん、と思いつつ、これを見ると（笑）、うれしくなってしまうっていう感じやね。」

C氏<透析後の不安定な状態を気にかけてくれる妻の言葉や、自分の身体を気にかける行為を思い浮かべ、支えてくれる妻に感謝する>

「マイナスのことは、あんまり言わない、お互いに（中略）。辛いかな、辛くない程度やったり。今日はきつい？とか。人によって感じ方が違うみたいで。僕の場合はね、終わった直前にね、ちょっとめまいするんです、ぐらぐらと。人によって違うみたい。だから、直後が一番危ないっていうか、僕は。転んだりするから。（中略）奥さんの作った食事を食べないとぐちぐち言われるから本当に面倒だよ。（、、、首を横にふり）いや、一生懸命に料理を作ってくれているから食べているんだ。」

テーマ2

自立した生活を保ちながらも、いざという時に頼ることの出来る人がいることに安堵する

患者は、どっぷりと人を頼るわけにはいかないと、ときには、かわいげがなかったり、遠慮がちであったりといった態度で周囲に接している。しかし、いざというときには頼ることのできる家族や友人がいてくれる。そう思えることで、患者はどこか安心していた。

B氏<頼ることの出来る家族がいることに、安堵する>

「娘（から）も、何かあったら、すぐ電話ちょうだいって感じで言われているし。父さん（夫）が入院したときも、（電話したら）ひょいって見たら横にいたって感じで来てくれて。後で、（電話するのを）その次の日も良かったなあと思うたり。そんな慌ててこさすようなことせんと。だめな母親です、本当に。でも、結局、頼るのは、あの子やしね。（側にいてくれると）安心する。」

A氏<甘え癖がつかないように、今は自分の身の回りのことは自分ひとりでしたい>

「（日常生活で人の助けを借りなくてはいけないことは）今のところ、何も無いわ。これをち

よっと助けてということは、何一つ、いま、今日現在ですよ、今日まで。（中略）甘え癖をつくる。だから、人から見れば、かわいげがないってということも。かわいげがない。」

A氏<いざというときに、頼ることのできる人はいる>

「素直に本当に頼むべきときは、頼めばいいと思う。だから、私は、今、3日空けずに友達をどんどん呼んで、食事を一緒にしとるというのは、やがて私も、買い物に行くのが大変やとかいことがあるかもしれん。そんなときに、今、絶えずうちに来てくれる人に、今日、あんパン買ってきて、あんたの分と私の分もらってきて、お礼はしないけど、一緒に物を食べよう。そして、今日を過ごそうと。」

C氏<跡取りとしての家族がしっかりしているから安心している>

「息子も嫁も、あの、しっかりしとるってことや（自分が守り築いてきた家も会社も守っていつてくれる）。無駄な金は使わないよ。もう車もいい。（心残り）は）ない、ない、全然ないです。」

テーマ3

年々衰える身体を自覚しながら、周囲の中で役割を果たす自分を抛り所にして今日を生きる

患者は、年々、衰える身体を自覚していた。時折、弱気な自分も顔を出す、それに負けまいと、周囲の中で役割を果たしていくこと、それを抛り所にして、今日を生きていた。

B氏<年々衰える身体を自覚しながら、役割を果たすために、自分の病に負けるわけにはいかないと踏みとどまる>

「体が頑固に辛かって、そんな感じでもなかったんです。透析の帰りも、バス停まで歩かんなんねけれども、そんなに辛くなかった。少し坂なんやけど、透析の後はきついんですよ。本当にだめや。1年1年や。1年ちょっと前までは、なんともなかったのに。本当がた一と、なってしまう。（中略）自分の病気に対して、結局負けてしまったら、私が父さんところに行けないでしょう。やっぱり涙出ることもあるよ。暗い気持ちになって、なんでって思うこともあるけれど、そんなこと思ってもどうにもならな

い。変な話、悪くなくても、良くは、父さんにしたかってね。今の状態が続くか、悪くなるしかないから。だから私は、もう負けてはいられない。」

A氏<周囲の中で役割を果たす自分であることが、自分にとっての拠り所である>

「私は、半分は自立して、半分は一緒に食べるの。何かお願いするではないの。(中略)昔からおせっかいなの、人がしたくないことを何でもしてあげようと。出来たことに対する優越感よね、言ってみりゃ。させてもらいたい、私、あのより上なんやと。口に出しちゃいかんよ。やっぱり私はね、優越感で今日まで生きてきたんだと思うね。」

C氏<今でも気にかかる家族がいる>

「旦那は旦那で、あの、空手やっとなんですよ。空手やっとなんもんで、公民館とか、そんなところで教えとるんですよ。『講習費もらっとなんか』言うたら『一銭ももらってないよ。無料やよ』言うて、『ばか』言うて、『何、これ5,000円でももらえ』って。ほんで、ガソリンも、うちの会社の提携のスタンドへ行っとなんいうし、ガソリンもただ。あいつは一番せこい、やっぱし。あれはあれで、ちょっとあれやったかなと思う。」

テーマ4

自分が成し遂げたいことのために、今、どうしてもこの身体が必要である

患者は、これまでを支えてくれた人への恩返し、今、頼ることの出来る人の期待に応えたい、周囲の中で役割を果たす自分でありたいと、自分が成し遂げたいことのために、どうしても今の自分の身体を必要としていた。

そして、過去の自分を思い出し、まるで自分に言い聞かせるかのように、自分の身体を大事にするためには、自分の身体に対して過信せず、過去にしてきたことは繰り返さないと心に固く決めていた。

B氏<成し遂げたいことのために、どうしても足だけは切りたくない>

「糖尿って、本家本元っていうか、それになると、私みたいに、透析になったり、神経障害だったりとか、うん、やっぱり、あるんやなと思っ。て。(ある人が)透析になって、その後、足(切

って)。結局、亡くなった。私より、(透析導入が)後なのに、だめやったんかなと思って。。。やっぱり私、あんな風にはなりたくない。足も切りたくないし、そんなことになったら、私、父さんとこ通えんし、それだけはだめやなと思っ。て。」

B氏<今の自分の身体を長らえさせるため、身体を大切にすることが今の自分の務めである>

「(他の患者が)あんなん(糖尿病に関するテレビ番組)見たらいかん、いろんなこと考えるからだめや、とかって言うけども、そんなもんでもないし、私はもう(3大合併症)、なっ。てしもうとるから。だから今は、父さんとこ行くのに。うん。だから、自分は、自分が倒れることできんから、やっぱりね、自分で体調管理せんなんらっ。ていうことでしょう。」

A氏<今の自分の身体に対して決して過信をしない>

「私は、(身体に対して)自信過剰だったんです。身体を痛めて死ぬことが、人間の最終目的やと思っ。とったからね。自分はね、人さまと違う。私は、大丈夫なんやという、やっぱそういうね、あのおごり、高ぶりかな。そういうもんがあったんですよ。」

C氏<楽しみを実行するという具体的な目標を持つことが、体力を維持するために必要である>

「70、2年前だから4歳か5歳か、こんなこと(透析治療)をやっとなん、もう暗くなるでしよ。この針刺すのだけ、もう嫌で。(中略)みんな、(気力が)のうなっ。てしまっ。とるね、もう気力で。(気力)だけじゃ駄目だけど、ここが面白いんだというのが。それは行きますよ。だっ。て西だから、本当に沼津。沼津いっ。たら、あの、箱根から30分ぐらいのところがあっ。て。全部、高速道路、その先。ほんで、今の車は便利でね、『低速で走れ』言うたら低速で走るし、追突はしないし。(中略)ただ、だっ。て、あのね、これ、あの、(車で温泉旅行を)やめたら、あの、老けてしまっ。て駄目ね。僕らがこの年で老けたら、やっぱり体力も多分、落ちるよ。」

考 察

ここでは、4つのテーマの意味と、そこから浮かび上がる患者の姿について考察していく。

1. テーマ1「透析を受けている自分の状態、または出来事を支えてくれた人々に、自分が生き延びてこられたことを感謝し、今の自分に出来る限りの恩返しをしたい」から浮かび上がる患者の姿について

3年を過ぎた糖尿病透析患者は、自分のこれまでの一番肝心な時を支えてくれた人として周囲の人々を思い出し、自分の生が、その恩返しのためにあると捉えていた。糖尿病透析患者の場合、非糖尿病透析患者と比較して、透析受容が低い²²⁾。しかし、今回の結果から、透析治療を受けている今を他者への恩返しという形で精一杯生きていた。そこには、透析治療になった不満や後悔は語られなかった。むしろ、周囲の人からの支えを自分に与えてもらったものとして感謝し、その恩返しをしようという思いを込めて生きて生活していた。

先行研究では、長期透析患者にとって、療養の支えとなるものは、家族あるいは周囲の人々との人間的なつながりが最も重要な要因²³⁾と報告されている。今回の結果から、患者にとって、これまでの療養を支えてくれた周囲の人とのエピソードを思い起こすことが、むしろ患者の周囲の人々との人間的なつながりを強めるのではないかと考えられた。さらに、医療者にとっても聴くことによる影響は大きいと考える。透析治療の実践現場で、積極的に患者の「語り」を聴くことによる医療者への影響として、患者の語りによって励まされ、透析従事者としての使命感・充実感を味わうことができるとの報告がある²⁴⁾。患者の思いを聴くことによって、今を精一杯生きて生活する患者の根底に、これまでを支えてくれた周囲の人々への感謝の思いが存在していることを、支える側である医療者や家族が知ったならば、応援したい存在、つまり積極的に助けてあげたい存在になれるのではないかと想像できる。また、これから透析治療を避けることの出来ない患者にとっては、透析治療の意思決定に影響する患者の姿である。さらに、透析導入時期にある患者にとっては、このような同病者の思いは、彼らがすすむべき灯台になるかと思われる。このように、これまでの療養生活を支えてくれた感謝の思いとその思いを胸に今を精一杯生きようとする患者の姿は、語る患者自身にとっても、周囲の人々にとっても、励みになることが示唆された。

2. テーマ2「自立した生活を保ちながらも、いざという時に頼る人がいることに安堵する」から浮かび上がる患者の姿について

今回の参加者には、1人暮らしの方も同居の方も含まれていたが、頼ることの出来る人が存在した。その相手は、医療者や、家族、友人であった。結果から、周囲の人に対して頼ることができることと、自分の出来ることをしようとする、自立と依存のバランスを保とうとする患者の姿があった。糖尿病で透析治療を開始した患者は、すでに糖尿病由来の合併症²⁵⁾により、療養生活を送るために他者の助けが必要になる。今回の参加者は、他者への助けを必要としたときに、自主的に助けを借りるという姿勢も持ち合わせていた。患者が自立を維持するために、他者の手をどのようにして借りるのか、それらを学ぶ必要があると考えられる。また、療養生活において、患者の中に、自力で行える範囲と他者に委ねる範囲といった基準は個人によって違うと考えられる。そのため、それらの基準、すなわち、患者の中にある自立と依存のバランスについて、支える側の人たちとも共有できることが、周囲との新たな関係を築いていくためには重要と考えられる。

3. テーマ3「年々衰える身体を自覚しながら、周囲の中で役割を果たす自分を抛り所にして今日を生きる」から浮かび上がる患者の姿について

結果より、心身ともに決して安らかではないが、役割を果たす自分を支えにして、何とか奮起して生活する姿が明らかになった。糖尿病透析患者の場合、糖尿病特有の合併症の併発と腎不全・老化などの相加により促進される合併症、また長期透析による合併症により身体症状の増悪が予想される²⁶⁾。透析治療を導入して3年が過ぎたとしても、糖尿病透析患者の場合、治療に慣れてくるものの、身体の急速な衰えのため、社会的な活動の幅が広がっていきにくいと予測される。患者にとって、所属する身近な集団の中で、役割を果たす感覚を持ち続けられることが、自分の存在価値を高め、その集団の一員としての感覚を保てると考えられる。逆に、その感覚を失ったならば、限られた集団の中で生活する彼らにとって孤立感や疎外感につながる可能性もあると考えられる。そのため、衰えていく身体を経験しながらも、身近な社会の中で、自分の役割を果たす感覚を持ち続けられることが、周囲との安定した関係を築いていくために非常に重要である。

4. テーマ4「自分が成し遂げたいことのために、今、どうしてもこの身体が必要である」から浮かび上がる患者の姿について

患者は、周囲の人々との関係の中で成し遂げた

い事柄を焦点化することによって、自分の身体を成し遂げたい事柄を果たすための必要な身体として位置付けることが可能であった。身体に対する患者の意識に関して、自覚症状がない糖尿病診断初期に自覚症状をどのように捉えているか²⁷⁾や、糖尿病性腎症の診断初期の患者を対象とし、身体をどのように捉えているかというテーマを扱った報告があり、それだけ、糖尿病患者にとって、身体の中に治療を必要とするだけの症状を捉えることの困難さが読み取れる²⁸⁾。さらに、透析導入時期に至っても、透析療法を行う実感が持てないことについての報告がなされており²⁸⁾、患者は、腎不全を患った身体を捉えにくいことが読み取れる。しかし、今回、患者の身体に対する意識は、成し遂げたい事柄を果たすための、必要な身体であり、透析治療を受ける今の自分の身体に対する労いの感覚を持っていた。今の自分の身体を大切に扱い、労おうとする患者の姿は、新たな知見であるといえる。この時期の患者にとって、自分の身体を労う感覚が持てることは、今の自分の身体を長期間維持するためには、それを支える周囲の人々との良好な関係性を築こうとする内的動機にもなると考えられる。さらに、自分の身体を支える透析治療の意味もまたポジティブな内容として受け止めているのではないかと推測でき、身体への労いの感覚は、患者のQOLに対する影響も示唆される。

以上より、今の自分の身体を大切に思い、その身体を元に、周囲の人とこれからの新しい関係をつくらうとする患者の姿として、感謝と恩返しを胸に精一杯生き抜く姿、自立と依存のバランスを保とうとする姿、衰えていく身体を持ちながらも役割を果たす姿、そして、自分の身体を大切に労う患者の姿が浮かび上がった。

5. 透析導入3年を過ぎた透析患者として生命を維持しながら、生活者として生きるために必要なケアについて

本研究の結果から、周囲の人に対する感謝と恩返しを胸に精一杯生き抜く姿、自立と依存のバランスを保とうとする姿、衰えていく身体を持ちながらも役割を果たす姿、自分の身体を大切に労う姿から、患者は身体を長らえさせたいという目標を持つことが出来ていた。つまり、周囲の人々への思いを語る中で、周囲の人々と深く長続きする関係性を築き、その社会の中で、自分なりの貢献をしながら生きて生活していく、そのための身体であるが故に、労わり長持ちさせたい、このような姿を患者自身で描くことが可能であった。しか

し、その思いは聴かなければ表現されることはない。そのため、「周囲の人々への思い」を積極的に聴くことは、患者が周囲の人々とのつながりを思い浮かべるきっかけとなり、これら4つのテーマから導き出された姿を患者の意識にのぼらせることが可能と考える。医療者は、患者の療養生活にサポート源があるかどうかの確認というよりも、患者に対して、周囲とのつながりを意識させ、周囲との関係の中で浮かび上がる自分の姿を認識させるために、周囲の人々への思いを丁寧に聴くことが求められる。

よって、この時期のケアとして、患者の意識に「自分の身体を大切に労う患者の姿」を描かせるために、周囲の人々への思いを積極的に聴くことの必要性が示唆された。そして、明らかになった患者の姿を意識化させるためのケアを実践し、その実践効果を評価していくことが必要である。

研究の限界

今回の研究結果は、透析歴に幅(3.5年、5年、8年)のある参加者3名の結果である。しかし、3名に共通するテーマを抽出することが出来たため、今後は、さらに透析歴を限定して参加者をサンプリングし、結果を精選する必要がある。

結 論

透析導入後3年を経過した2型糖尿病患者3名の周囲の人々に対する思いとして、4つのテーマが抽出された。

- ①透析を受けている自分の状態、または出来事を支えてくれた人々に、自分が生き延びてこられたことを感謝し、今の自分に出来る限りの恩返しをしたい
- ②自立した生活を保ちながらも、いざという時に頼ることの出来る人がいることに安堵する
- ③年々衰える身体を自覚しながら、周囲の中で役割を果たす自分を拠り所にして今日を生きる
- ④自分が成し遂げたいことのために、今、どうしてもこの身体が必要である

4つのテーマより、今の自分の身体を大切に思い、その身体を元に、周囲の人とこれからの新しい関係をつくらうとする患者の姿として、感謝と恩返しを胸に精一杯生き抜く姿、自立と依存のバランスを保とうとする姿、衰えていく身体を持ちながらも役割を果たす姿、そして、自分の身体を大切に労う患者の姿が浮かび上がった。

以上より、4つの浮かび上がった患者の姿を十

分に活用したケアの重要性が示唆された。

謝 辞

本研究に参加してくださいました皆様には、研究参加に承諾していただき、重要な話をご提供していただきました。ここに厚く御礼申し上げます。

なお、この論文は、第18回日本糖尿病教育・看護学会学術集会において発表した。

利益相反

利益相反なし

文 献

- 1) 井関邦敏：CKDの疫学，医学のあゆみ，222 (10)，771-774，2007
- 2) 日本透析医学会統計調査委員会：わが国の慢性透析療法の現況（2018年12月31日現在），透析会誌52(12)，679-754，2019
- 3) 遠藤三保子：透析医療のあり方 MSWの立場から－透析患者の精神医学と心理療法－（初版）日本メディカルセンター，23，東京，1989
- 4) 春木繁一：患者・家族の教育 はたして「教育」で済むのか？，臨床透析，19(8)，1126-1129，2003
- 5) 畠山禮子，福岡裕美子：精神的ストレスから見た血液透析患者の求めるソーシャル・サポートに関する調査・研究 成人看護（慢性期）・老人看護の視点から，秋田桂城短期大学紀要，16，92-103，2004
- 6) 細見明代，能川ケイ：血液透析患者のQOLの向上に関する一考察 日常生活状況の実態から，神戸市立看護短期大学紀要，14，83-93，1995
- 7) 木本未来，稲垣美智子：透析導入時期にある2型糖尿病患者が家族を思い描くという現象，日本糖尿病教育・看護学会誌，16(1)，23-30，2012
- 8) Osthus TBH, Lippe Nvd, Ribu L, et al. : Health-related quality of life and all-cause mortality in patients with diabetes on dialysis, BMC Nephrology, 13, 78, 2012
- 9) Soleymanian T, Kokabeh Z, Ramaghi R, et al. : Clinical outcomes and quality of life in hemodialysis diabetic patients versus non-diabetics, Journal of Nephropathology, 6 (2), 81-89, 2017
- 10) 三生和歌子：糖尿病性腎不全患者の怒りと透析時間延長の拒否に対する理解と対応 心の問題を抱える患者と家族への援助，透析ケア，6 (2)，173-178，2000
- 11) 宇田有希：透析導入になった糖尿病患者への援助，Quality Nursing, 7 (6)，481-486，2001
- 12) 白石純子：糖尿病透析患者の精神的，心理的，心理社会的特徴．腎と透析，53(6)，739-742，2002
- 13) 島袋瑞枝：透析導入を拒み続けた高齢糖尿病患者の支援～透析導入に対し患者と家族の意見対立があった事例～，沖縄県立中央病院雑誌，42，10-13，2016
- 14) Lee VY, Seah WY, Kang AW, et al. : Managing multiple chronic conditions in singapore-exploring the perspectives and experiencec of family caregivers of patients with diabetes and end stage renal disease on haemodialysis, Psychology & health, 31(10)，1220-1236，2006
- 15) 池田優紀子，西村勝治，片村幸代：【患者の心に寄り添う透析看護 精神科医と考えるサイコネフロロジー】スタッフに対する要望が強い患者，透析ケア，25(1)，72-75，2019
- 16) 春木繁一：サイコネフロロジーの臨床（初版），メデिका出版，64-82，大阪，2010
- 17) 高山陽子：透析を受けている壮年期の患者と配偶者の思い，第37回長野県看護研究学会，16-18，2016
- 18) Diers D. : 小島道代，岡部聰子，金井和子訳，看護研究 ケアの場で行うための方法論（初版），日本看護協会出版会，12-17，東京，1998
- 19) 広瀬寛子：看護研究における現象学的アプローチの適応に関する考察－看護面接過程の現象学的分析方法作成までのプロセスに焦点を当てて－日本看護科学会誌，12(2)，45-57，1992
- 20) Giorgi A : The theory, practice and evaluation of the phenomenological method as a qualitative research procedure. Journal of phenomenological Psychology, 28(2)，235-260，1997.
- 21) Holloway I. & Wheeler S. : 野口美和子監訳 ナースのための質的研究入門 研究方法から論文作成まで（第1版），医学書院，東京，120-136，2000
- 22) 小池美貴，藤田祐子，宮崎彩乃 他：糖尿病性腎症患者の透析受容の関連要因の検討－非糖尿病性腎症患者との比較－，看護実践学会誌，

- 31(1), 35-43, 2018
- 23) 寺師宗和, 森田隆久, 上村伸一郎, 他: 長期透析患者の心理学的側面についての検討, 透析学会誌, 18(2), 123-131, 1985
- 24) 市丸喜一郎: 透析患者との付き合い方-「透析患者の語りの会」から-, 日本透析医会雑誌, 30(2), 262-270, 2015
- 25) 小坂志保: 療養生活を支える看護⑥糖尿病性腎症患者の看護, 一般社団法人日本腎不全看護学会編, 腎不全看護 (第5版), 医学書院, 209-211, 東京, 2016
- 26) 原茂子, 乳原善文, 小椋陽介, 他: 血液浄化療法腎臓疾患糖尿病性腎症 糖尿病性腎症の予後と死因, 日本臨床, 50 (増刊号), 203-209, 1992
- 27) 中村あゆみ, 稲垣美智子: 受療1年以内の2型糖尿病患者が自覚症状を捉える仕組み, 日本糖尿病教育・看護学会誌, 13(2), 136-145, 2009
- 28) 辻口彩乃, 稲垣美智子, 多崎恵子, 他: 糖尿病腎症初期患者の診断時における身体の捉え方の様相, 日本糖尿病教育・看護学会誌, 16(2), 125-132, 2012
- 29) 藤田祐子, 稲垣美智子, 多崎恵子, 他: 糖尿病性腎症患者の内シャント造設が透析生活に与える影響, 日本糖尿病教育・看護学会誌, 22(1), 7-17, 2018